

男女共同参画推進せんだいフォーラム 2022

先達に聞く 2022

長く活動してきた女性たちが語る、「次世代に伝えたい思い」

2022年11月18日(金)
エル・パーク仙台 市民活動スペース

目次

「女の子が自ら考え、行動する力を伸ばす」 佐藤 三代子 ガールスカウト仙台地区協議会 監査	P.1
「人生は“楽しむ”もの」 柳沢 貞子 県立高校共学教育の充実を求める会 事務局	P.2
「NPO の在り方を伝え続けたい」 大久保 朝江 認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる 顧問	P.3
「子育てに絵本を！生命への祝福と尊敬を！」 佐々木 博美 だいちゃん文庫／みやぎ親子読書をすすめる会	P.4
受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ	P.5

※この記録は、ご本人の発言をもとにまとめたものです。

※仙台市男女共同参画推進センターのホームページで、
この冊子の PDF ファイルをダウンロードできます。

URL <https://www.sendai-l.jp/>

「女の子が自ら考え、行動する力を伸ばす」

佐藤 三代子 (さとう・みよこ) さん

ガールスカウト仙台地区協議会 監査

1974年 長女のガールスカウト入団と同時に活動開始
1988年 ガールスカウト宮城県第14団団委員長
2010年 ガールスカウト宮城県第4団団委員長

「少女と女性の視点に立ってリーダーシップを発揮できる人材を育てる」というガールスカウトの活動をこれからも続けていきたい。



外に出て学んだこと

私は21才で農家の嫁になりました。結婚当時は買い物以外なかなか出かけることができずにいましたが、子どもが学校に入り、PTAや社会学級、ガールスカウトの役を引き受けることで、外へ出ることがだんだん多くなりました。「子どものための活動だから」と許してもらえたのです。社会学級では、女性の社会参加、男女平等、女性の生き方などを学びました。私の日常とはあまりにも違って、「はっ」と気づき、考えさせられることばかりでした。

ガールスカウトの目指すもの

ガールスカウトは、少女と若い女性が自分自身と人々の幸せ、そして平和のために、責任ある市民として自ら考え行動できる人になることを目指しています。

「自己開発」「人との交わり」「自然と共に」という3つのポイントを大切にしながら、自分たちがやりたいことを見つけて計画を立て、実行することで、コミュニケーション能力や実行力、責任感を身につけます。

「ガールスカウトはなぜ女の子だけなの？」と問われますが、「少女の力を伸ばすこと」を最優先としているからです。重い荷物は工夫して皆で運び、物事を決める時は話し合って民主的に進めることで、自ら考え行動する力が培われていきます。ガールスカウト活動をしている子どもたちは、一般の中高生と比べて自己肯定感が高いと聞かされます。社会に出ても自分の選択で行動できるようになれるのです。

大先輩の言葉

私がこれまで活動を続けられたのは、青森県弘前市の佐藤初女(さとう・はつめ)先生の「奉仕のない人生は意味がない」「奉仕には犠牲が伴う」「犠牲の伴わない奉仕は真(まこと)の奉仕ではない」という言葉があったからです。初女先生が、心の病んだ人や苦しみを抱えた人におむすびと地元の旬の食材を使った食事でも

てなし、ただ黙って話を聞くことで、大勢の人が元気になりました。初女先生はガールスカウトの大先輩で、たくさんのお言葉をいただきました。

活動が元気の源

40年ほど前に両親が亡くなり、長男や長女は仙台を離れ、夫が単身赴任をスタートしたことで私は一人暮らしとなり、活動にますます精が出ました。その当時、ボランティアのため毎日のように出かける私に「お母さんは何で働かないの？」と息子が聞くのです。「だってね、色々な体験から感動を得られるけれど、それはお金では買えないのよ。働いて稼いでも体調を崩したらなんにもならないでしょ。元気でいられることが何よりでしょ」と答えたら、「ボランティアがお母さんの元気の源なんだね」と納得した様子でした。80才を過ぎた今でも、具合が悪くて寝込んだことはないし、お産以外入院したこともありません。「女の子たちのため」と言いながら活動してきましたが、子どもたちと一緒に私も成長させていただいたことに気づかされます。喜びと誇りを持ってもう少し続けていきたいと思っています。

継続は力なり

時代と共に社会が変化し、親も子どもも価値観が変わってきました。今はスマホで何でもできるし、何でも分かりますが、自分で決めたいろんなことに挑戦し体験してほしいと思います。継続は力なり。せめて10年は続けてほしい、それが生きる力となります。体験から小さなことに気づき、気配りができ、感謝につながります。

どんな状況でも自分で考え決定し、行動を起こしていく力を育て、社会に変化をもたらすことのできる女性になってほしいと願っています。

「人生は“楽しむ”もの」

柳沢 貞子 (やなぎさわ・ていこ) さん

県立高校共学教育の充実を求める会 事務局

宮城学院女子大学 家政学科卒業
NPO 法人家庭科教育研究者連盟 宮城県理事
33年間教諭として高等学校に勤務。宮城県の男女別学だった高校は共学となったが、課題の残る施設、設備、部活動や生徒会活動などにおけるジェンダー平等実現のため、活動を続けている。



男も女も「仕事も家庭も」

私が働いていた頃は、仙台市内も地方も、中心校は男女別学校でした。小中学校は男女共学で、高校になって別々に学校生活を送るといのは、お互い意見交換もできずとてももったいないなと思っていました。それが今、みな共学校になり、めでたしめでたしかと思いきや、中身はまだまだです。男は仕事、女は家庭というのをまだ引きずっています。男も女も仕事と家庭、両方やってこそ楽しく生活できんではないのかな。

家庭科は、衣、食、住、家庭経営、保育、五つの領域をやりますが、男子はやってこなかった。男性は家族を養うために働くばかりで、ほんとに楽しい生活だったのか…。人生っていうのは、ただ生きていたって、楽しくはない。人生は“楽しむ”ものだから、自分からやりたいことをやらなければ、全然楽しくないですよ。楽しむためにはね、やっぱりお金も必要。仕事でも家庭でも自分を最高に活かしたいと思いますね。

二人でやれば上手くいく

家庭科って裁縫だけではない。昔は、お風呂場でたらいを出して洗濯板でゴシゴシやって洗濯して、かまどでご飯を炊いて。でも今はみな電動になって、掃除もお掃除ロボットがやっているでしょう。昔と今では状況が違うけれど、家の中のことは両方でやった方がいい。私も夫も共働きで教員でしたから、新婚の時から二人でやっていました。最初は夫が朝に「新聞」って言って自分は動こうとしないもんだからびっくりして。でも「自分で取ってきたらいいさ。私こっち(料理)やるんだから」と返して。そしたら夫はひとりで黙々と読み続けるもんだから「私だって朝のホームルームで今日のニュースを話したいから私にも貸して」となって。二人で言い合って、最終的にじゃあご飯は二人で作ろうかということになりました。

得意不得意は誰にでもある

女性とはいえ、料理が上手なわけじゃないんですよ。女子高にいたときにね、調理実習で、まあ焦がすわね。真っ黒にしてどこ食べたらいいんだなんてね。生まれながらにして女性は料理が上手にできるわけではないのです。お寿司屋さんでも、「はい一丁」って握るのはみな男の人でしょう。レストランでも飲み屋でも、厨房にいるのは男の人が多い。上手い下手は性別では分かりません。女性が「つくる人」で男性が「食べる人」と決めて、もしお母さんが料理下手だったらその家族は美味しくない料理を一生食べなきゃいけないものね。なんと不幸な、と思いませんか。お父さんの方が、しょっちゅう外食したり呑み屋で飲んで帰ってくるから、口も肥えてる。こういう人にも作ってもらいましょうよ。

魔法の言葉で楽しくなる

一緒にやるっていうのはね、とても大きなことだと思います。お互いに上手下手があるわけですよ。得意分野がね。それを二人でやれば短時間でできる。一人でやるとすごく時間がかかるものも、二人でやれば二分の一、三分の一ぐらいで終わる。早く終わったらお互い自由に時間を使えるでしょう。

二人でやるにはね、コツがあります。魔法の言葉っていうのがある。簡単です。さしすせそなの。「さ」は「さすがだね」、「し」は「しかしたいしたもんだね」、「す」は「すごいね」「すてき」「すばらしい」、「せ」は「世界一だね」。「世界一」て言うのと「バカにすんな」って言われそうだけど、「そ」で「そうだ、そうだ、そのとおりだ」「そうきたか」ととにかく褒めまくる。褒められると、子どもでもお父さんでもお母さんでも誰でも嬉しくなるし、自信がつきます。さしすせそを大いに連発して、家で楽しくやっていただきたいな。人生は楽しいものではなく、楽しむものですから。

「NPO の在り方を伝え続けたい」

大久保 朝江 (おおくぼ・ともえ) さん

認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる 顧問



市民活動歴 31 年。1993～95 年「仙台青葉の杜子ども劇場」運営委員長、1996 年、98 年に「わたちのメッセージ」委員会委員長を務める。1999 年 1 月から「杜の伝言板ゆるる」の代表となり、その後 NPO 法人化し 2020 年 5 月まで代表理事。この間、3 度米国デラウェア大学 NPO マネジメント短期研修に参加。2005 年～2019 年「みやぎ NPO プラザ」館長。現在、一般財団法人愛知揆一福祉振興会の専務理事を務める傍ら宮城大学大学院博士後期課程で研究を続けている。

市民活動のきっかけ

ずっと市民活動分野を歩いてきました。初めて参加した市民活動は「仙台青葉の杜子ども劇場」の活動だったのですが、2 年もしないうちに運営する側にまわり、そこからだんだん市民活動にはまっていきました。

エル・パーク仙台がオープンした当初から、「わたちのメッセージ」というイベント（※現在の男女共同参画推進せんだいフォーラム）が秋に行われていたのですが、5 年目あたりに、仙台市の担当者から実行委員会に運営の主体を移そうという動きがありました。当時私も実行委員会のメンバーだったのですが、その後年々託されることが増えていき、自立した運営を行うようになるとともに、様々な団体への支援を経験しました。

要望から提案へ

市民活動をやっていると、どうしても世の中の困っている事に対して行政に物申す的などところがあり、あれしてこれしてなどと「要望型」になることがすごく多かったのですが、いつまでも要望じゃないだろうと思うようになりました。どうしたらいいのかという部分への提案が、これからは求められていくのではないかと。これは私が活動している中から学んだことの一つでした。提案して実際何かをやっていくというその在り方がまさしく、市民活動の原点なわけです。

私が「わたちのメッセージ」の実行委員会をやっている当時、世の中ではだんだん NPO という言葉が広がり始めている頃で、法人格を取得するための運動なども全国的に展開されていました。私は活動していた団体の代表を離れて別の団体に関わり、後に NPO 法人化しました。

NPO の存在意義

「杜の伝言板ゆるる」は市民協働に関する情報誌を発行する団体で、1996 年 12 月に活動が始まっているのですが、私は 1997 年の 2 月ぐらいから関わっており

ます。その年、宮城県がアメリカのデラウェア州と姉妹州県を結び、翌 1998 年にデラウェア州で、宮城の NPO のリーダーを対象にした研修事業がありました。私も手を挙げ、アメリカで 2 週間学びました。

現地で研修マネジメントをしてくれた地元の日本人女性から、懇親会で衝撃的な言葉を受けました。NPO が始まった頃、日本からも多くの議員や大学の先生、NPO のリーダーなどが研修・視察に来たけれども、皆 NPO を運営する「仕組み」だけを見て帰っていったと言うのです。NPO の存在意義というのは、それをやる人達のひとつの思いであり市民性なんですね。自分達がいろんなことを考えて、これがいいと思うことを選択して、それに対して提案型で行動に移していく。その姿がまさしく NPO の在り方、民主主義の基本であるのに、そこに気付かずみんな帰っていくと怒っていらしたんです。実は私もそんな風に思っていなかったので、話を聞いた時にはすごくびっくりしたわけですが、その言葉が私のその後の市民活動支援の中では生きていて、今もずっと大事にしております。

これからも伝え続ける

2 年半前にリタイアしたとはいえ、まだそういった思いがあるものですから、今年の夏に長町のエフエムたいはくというコミュニティエフエムの方からお誘いを受けた時には、これはいいことだと思い「杜の伝言板ゆるる」として引き受けました。「杜の伝言板ゆるる」は紙媒体の情報発信を主軸にしてきましたが、紙媒体をやめてから思うように情報発信できていないことに気づいたのです。番組では NPO の団体紹介の番組ではなく、なぜ NPO 活動が必要なのかなど、今の社会課題を市民に気づいてもらう番組にしたいと思い、かなりこだわって話をしています。毎週のことなのでネタ探しも大変ではありますが、NPO の在り方に気づいてもらうためには重要だと感じております。よろしかったらエフエムたいはくの月曜日夜 7 時半から 30 分番組で放送しておりますのでお聴きいただけたらうれしいです。

「子育てに絵本を！生命への祝福と尊敬を！」

佐々木 博美 (ささき・ひろみ) さん

だいちゃん文庫／みやぎ親子読書をすすめる会



1988年 夫の転勤に伴い仙台市へ転居。近所の家庭文庫の魅力に親子ではまる。また、みやぎ親子読書をすすめる会の活動に家族で参加。その後運営委員になる。

1990年 「だいちゃん文庫」を始める。(週1回)

1992年 主に障害を持つ子の子育て中の母親を応援したいという思いで「だっこの会」を始める。(月1回)

現在は親子の幸せを願って、図書館や児童館等でおはなし会などをおこなっている。

子育てに絵本を

皆さまに伝えたいことは、二つあります。まず一つは「子育てに絵本を！」です。絵本は子どものためだけではありません。絵本を読むことは、子どもにとっては愛された記憶に、読み聞かせた親には愛した記憶となり、一生の宝物になると実感しているこの頃です。

我が家には44歳の長男と39歳の次男がおります。長男が誕生した当時、私に絵本の知識はほとんどありませんでした。でも夫はなぜか長男のために絵本を買い、読み聞かせていました。長男は絵本が大好きになり、私もその面白さに魅了されました。

当時のことを夫に尋ねると「自分は子育てが苦手なことを自覚していたが、自分の声を息子に届けたいと思った。そのために絵本を読んだんだ」と言うのです。確かに生の声は大切ですね。近頃、我が家の晩酌の肴に当時の絵本が登場します。内容はもちろん、その時の状況まで鮮やかに思い出し、とても幸せに思います。

次男にはダウン症があり、言葉の遅れがとても心配でしたが、ある専門家から「言葉は入ったものしか出てこないのだから、たくさん入れましょう。日常の言葉だけでは足りないので絵本の力を借しましょう」と教えていただきました。次男のゆっくりとした発達の中で絵本の体験は毎日の喜びとなり、希望でもありました。絵本の登場人物になりきって遊んだ数々のエピソードも幸せな思い出です。

家庭文庫との出会い

夫の転勤で仙台へ転居し、近所の「家庭文庫」と出会ったことは特筆すべきことです。そこは老若男女が絵本の喜びを交換する場でした。絵本は人間関係も豊かにしてくれました。「みやぎ親子読書をすすめる会」に出会ったのもこの頃です。近所の絵本仲間から、さらに広い範囲の人ともつながり、私たち家族を育てていただきました。

次男の学校生活が豊かになることを願って、小学1年

生の春、週1回の「だいちゃん文庫」を始めました。級友やご近所さんが来てくれて次男の笑顔が増えたことは言うまでもありません。それから2年後、障害のある子とその親を応援し支援する、月1回の「だっこの会」を始めました。

全ての命を祝福してほしい

もう一つの伝えたいことは、「生まれた生命に祝福を。今ある生命に尊敬を！」です。ある時、生後2ヶ月のダウン症のある赤ちゃんを抱っこした母親が「この子が生まれても誰もおめでとうと言ってくれない」と涙ながらに話すのです。障害がわかった途端、笑みが消え、深刻な表情になると。私は思わず「おめでとう！会えてうれしいよ！」と抱きしめました。

我が家の場合もそうでした。次男の誕生の時、知人で支援学校の教師をしている方の押し黙った顔を忘れられません。あの時、まずは「かわいいね、誕生おめでとう」から始まり、将来の様々な幸せの形を示してくれたら、少しでも希望あるスタートだったでしょう。

障害をもつ子の将来は不安だらけですか？この子は幸せにはなりませんか？子どもの幸せを願うことは当たり前ですが、幸せの形は様々であるということをもう一度考えていただきたいのです。障害があってもなくても、そもそも人生は想定外のことだらけで、それでもたくさんの力を借りながら人は前に進んでいきます。けがや病気、老い、認知症など変化しながらも、それぞれの人生をまっとうします。

次男は不登校やうつ病など色々あり、その度に悩み考えることだらけでしたが、たくさんの支援を受け、多くの友人たちから笑顔をいただきました。本人は「僕は幸せだよ！」と言います。現在は在宅を選んで生活していますが、新しい支援サービスで目標ができ、息子も私もわくわくしているところです。

色々な生き方、暮らし方があっていい、幸せの形も様々と改めて思います。子育ての得意でない親こそ、障害をもつ子こそ、絵本を！生命への祝福と尊敬を！

受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ

[佐藤 三代子さんへ]

- ・女性たちや少女たちに「挑戦する気持ちを持って欲しい」というガールスカウトの理念にとっても感動しました。
- ・「自分で考えて行動できるように」というのは大事なことだけれど、訓練しないとなかなかできないことですよね。素晴らしい活動だと思います。
- ・女性だけの活動が自己肯定感を育むというお話にとっても共感しました。信念と感受性を持ち続けていらっしゃる姿とても素敵です。
- ・ガールスカウトの理念や、そこで培われる力を知り、今後もなくしてはならない組織だと改めて思いました。日頃出会う女の子たちに、自分は何ができるのか考え続けていきたいです。

[柳沢 貞子さんへ]

- ・女性だからって料理が上手なわけじゃない」という言葉に大変勇気づけられました。シンプルでとても良い言葉をいただきました。
- ・豊かな人生を生きるために、誰もが衣・食・住を学ぶべき！柳沢さんの生徒になりたかったです。
- ・人生を楽しむために、なんでも一緒にやるというメッセージにパワーをもらいました。「さしすせそ」を実践したいと思います。
- ・「家庭科」というとどうしても「女子」というイメージがありましたが、家事分担を「男女」という視点で分けなくていいことで人生も豊かになるのだと思いました。

[大久保 朝江さんへ]

- ・地域に密着すると視野が狭くなりがちですが、様々な出会いから刺激を受けて広く発信されていることにとても感銘を受けました。
- ・ブレずに長く市民活動支援をされてこられた大久保さんの核となったものを見せていただいたような気がします。仙台に大久保さんのような方がいてくれてよかったです。
- ・要望型から提案型へ。NPO の在り方を伝え続ける杜の伝言板ゆるるの活動は、仙台市の市民協働、NPO 活動の象徴だと思いました。
- ・「提案」が市民活動の原点だということを改めて学びました。なぜ社会に NPO が必要なのか、考え続けたいと思います。

[佐々木 博美さんへ]

- ・「幸せのカタチは色々あっていい」という言葉が心に響きました。私も自分らしい幸せを見つけようと思います。
- ・自分も子どもに本の読み聞かせを行ってききましたが、「本を読んでもらった子は愛情を感じる」という言葉を聞いて、やってきて良かったと思いました。
- ・絵本・文庫・読み聞かせ、そういった文化が仙台に根付いているのは、佐々木さんのように熱い気持ちのお母さんたちの活躍があったからということに気付かされました。
- ・「生まれた命に祝福を！生きている命に尊厳を！」という言葉をも大切に生きていきます。



男女共同参画推進せんだいフォーラム 2022
「先達に聞く 2022」

2023 年 3 月発行
公益財団法人せんだい男女共同参画財団

仙台市男女共同参画推進センター
エル・パーク仙台
〒980-8555
仙台市青葉区一番町 4-11-1
141 ビル（仙台三越定禅寺通り館）5・6 階
TEL. 022-268-8301
FAX .022-268-8316